

平成 18 年度 社団法人ロシア東欧貿易会 極東ロシア港湾・物流視察団 報告

平成 18 年(2006 年)8 月 25 日
社団法人ロシア東欧貿易会

社団法人ロシア東欧貿易会は、平成 18 年 7 月 30 日(日)～8 月 5 日(土)の日程で、高垣 佑 ロシア東欧貿易会会長を団長として、極東ロシア地域の港湾物流施設を視察するミッションを派遣した。視察団の概要と現地視察の報告は以下のとおり。

1. 日程

平成 18 年(2006 年)

- 7 月 30 日(日) 新千歳空港 → サハリン州ユジノサハリンスク空港
7 月 31 日(月) 10:30-11:30 ズリフコ・コルサコフ市長との面談
11:30-12:15 コルサコフ・フェリー商業港視察
13:30-16:00 サハリン II LNG 建設現場視察
18:00-20:00 夏井重雄・在ユジノサハリンスク日本国総領事公邸訪問
8 月 1 日(火) 午前中 ユジノサハリンスク空港 → ソフガワニ空港(ワニノ港)の移動を予定していたが、ソフガワニ空港付近の天候が悪く、移動できず、ワニノ港視察は取りやめとなった。
ユジノサハリンスク空港 → ウラジオストク空港 → ナホトカへ移動
8 月 2 日(水) 10:00-12:00 ナホトカ港視察
14:00-14:30 ヴォストーチヌィ港石炭ターミナル視察
14:45-15:15 ヴォストーチヌィ港コンテナターミナル視察
16:00-16:30 コズミノ湾視察
8 月 3 日(木) 10:00-11:00 スラビャンカ港視察
13:00-14:00 トロイツァ港(ザルビノ港)視察
15:00-16:00 ポシエト港視察
8 月 4 日(金) 16:00-17:00 ウラジオストク商業港視察
8 月 5 日(土) ウラジオストク空港 → 成田空港

2. 参加者名簿

- ①高垣 佑 団長 社団法人ロシア東欧貿易会会長
②森中小三郎 副団長 住友商事株式会社 特別顧問 社団法人ロシア東欧貿易会副会長
③西村 潔 国際協力銀行 国際金融第 2 部 部長
④谷村 宏 住友商事株式会社 電力・水事業第 2 部
⑤伊藤 純一 住友商事株式会社 物流保険事業本部 本部参事
⑥尾上 修平 住友商事株式会社 モスクワ事務所 所長付
⑦久保田 三郎 双日株式会社 ロシア市場対策室 室長
⑧竹中 一雄 竹中事務所 代表
⑨岩永 壮司 東京ガス株式会社 秘書部経営調査室 主幹
⑩関 浩一 東京電力株式会社 燃料部 石炭グループ 部長

- ⑪安達 昌弘 日本郵船株式会社 定航マネジメントグループ 船長
- ⑫朝倉 紀彦 北陸環日本海経済交流促進協議会 調査部 理事・調査部長
- ⑬寺島 浩司 松下電器産業株式会社 CIS 中近東アフリカ本部 参事
- ⑭渡辺 敢悟 丸紅株式会社 サハリン開発部 課長
- ⑮中川原 俊輔 三井物産株式会社 経営企画部戦略推進室 地域主幹
- ⑯遠藤 寿一 三菱商事株式会社業務部 顧問 社団法人ロシア東欧貿易会 顧問
- ⑰白井 泰裕 三菱重工業株式会社 広島製作所 運搬機設計課 主席技師
- ⑱中井 彦実 株式会社三菱東京 UFJ 銀行 国際企画部 上席調査役
- ⑲岡田 邦生 社団法人ロシア東欧貿易会 ロシア東欧経済研究所 次長
- ⑳原 真澄 社団法人ロシア東欧貿易会 経済協力部 調査役
- (21)安川 豊 株式会社大陸トラベル 営業部 取締役営業部長

3.視察・面談の概要

①7月31日(月) 10:30-11:30 ズリフコ・コルサコフ市長との面談

サハリンおよびコルサコフの経済発展と日本との交流拡大について

- ・サハリンプロジェクトは重要であるが、日本との間で広範囲な経済関係、人的交流を深めることも重要である。
- ・サハリンの自然、日本との歴史、グルメ、サハリンプロジェクトの LNG 等の施設を観光資源としての観光開発を行っていききたい。
- ・稚内-コルサコフ間に定期フェリー宗谷丸の利用拡大を図るため、コルサコフ港にフェリー専用港を建設したい。
- ・観光客を現在の数千人から数万人単位に伸ばしたい。また観光客をコルサコフに宿泊してもらうため、コルサコフ港、海を望む高台にホテルを建設したい。イタリア企業からの具体的な提案もあるが、できたら日本企業からも提案してほしい。
- ・観光資源として、旧北海道拓殖銀行の建物を整備したり、ゴルフ場を建設したい。
- ・サハリンエナジーからは、土地の賃貸料として年間 300 万ドルを受領する。また、病院、体育館、プールなどの市の社会インフラの建設に関しても 1,000 万ドル程度の協力を約束している。



フェリー乗船場と木材積出しが隣接しているコルサコフ港

②7月31日(月) 11:45-12:15 コルサコフ・フェリー商業港視察

ガルキン コルサコフ市コルサコフ港管理局

アントーノフ ロス・モル・ポルト主任技師

- ・国から港を借り受けている有限会社コルサコフ商業港が管理を担当している。
- ・商業港のバースの全長は 1730 メートル。
- ・商業港の一部に客船の乗船場があり、安全上の問題がある。港の管轄がロシア連邦運輸省に戻れば、よりよく商業港部分と客船港部分が利用できるようになると思われる。
- ・年間の貨物扱量の能力は 200 万トンだが、現状では十分に荷物が無い。



コルサコフ商業港の全景

③7月31日(月) 13:30-16:00 サハリンⅡLNG建設現場視察

サハリンエナジー社が開発しているコルサコフ近郊プリゴロドノエ地区サハリンⅡLNGターミナル建設現場を視察した。

2008年からのLNG生産・出荷に向け、第1、第2トレイン、LNGタンク、LNG積出バース、パイプラインなどの建設が急ピッチで進められていた。現在、9割の工程が終了している。完成すると2つのトレインにより、年間960万トンのLNGが生産・出荷され、東京電力、東京ガスをはじめ、その多くが日本に向け出荷されることになる。



LNG積出バースの建設も進んでいる



④8月2日(水) 10:00-12:00 ナホトカ港視察

ヘガイ・ナホトカ商業港営業副部長

クストレイ・沿海地方行政政府交通局国境地域インフラストラクチャー部部长

シェルビナ・ナホトカ市市長アシスタント

ナホトカ商業港は、鉄鋼を中心としたロシアの産業グループであるエブラスグループ傘下のエブラスホールディングが所有している。ナホトカ商業港の主な取扱品は、鉄鋼製品、木材、アルミ、機械、中古自動車などで、2005年の取扱高は655万トンであった。鉄鋼グループの傘下であるため、取扱品のうちほとんどが鉄鋼製品となっており、東南アジアに向け輸出されている。木材は丸太のほか、TMバイカルで製造された製材など年間120万トンを扱っている。鉄鋼製品と中古自動車の取扱量を増やすため、施設の改修や増強が行われている。



鉄鋼製品バース



木材バース

⑤8月2日(水) 14:00-14:30 ヴォストーチヌイ港石炭ターミナル視察

ヴォストーチヌイ港は、取扱量でノヴォロシースク港、サンクトペテルブルグ港に次いで、ロシアで3番目であり、日ソ経済協力事業として1970年代に建設された。石炭ターミナルは1978年に三井鉱山の協力により建設された。2005年の石炭取扱量は1,400万トン。2009年に完成予定で、拡張工事が進められており、完成後の取扱能力は2,400万トンとなる。石炭ターミナルは、大手石炭会社クズバス・ラズレズ・ウーゴリが所有しており、同社の所有する東シベリア・クズバス産のほか、ヤクート産の石炭を扱っている。



⑥8月2日(水) 14:45-15:15 ヴォストーチヌイ港コンテナターミナル視察

ヴォストーチヌイ港のコンテナターミナルを運営しているのは、ヴォストーチヌイ・インターナショナル・コンテナ・サービスズ(VICS)という会社で、2005年に国内向けコンテナ等を業務としていたヴォストーチヌイ・スチヴイドルヌイ・カンパニー(VSC)と合併し、現在、同社が輸出入、トランジット、国内のコンテナを扱っている。

ヴォストーチヌイ港コンテナターミナルの取扱量は、ソ連崩壊後の混乱による低迷を経て、ここ数年増加傾向にあり、2005年は約18万TEUであった。とりわけ、ヨーロッパまで、海上輸送では40日間かかるのに対し、シベリア鉄道を利用した鉄道輸送では12日間という利点を生かして、トランジット・コンテナの利用が増え、2005年は9万TEUに上った。トランジット・コンテナの全体の7割は韓国を占めるフィンランド向けの、しかし、2006年1月に、ロシア鉄道が、トランジットコンテナに対する運賃を大幅に値上げしたことにより、今年は取扱量が激減している。VICSをはじめ、日本、韓国、フィンランドの輸送業者や荷主がロシア鉄道に対し、運賃政策を戻すように働きかけている。



⑦8月2日(水) 16:00-16:30 コズミノ湾視察

東シベリア・太平洋石油パイプラインの積出港の建設予定地については、去年は、ウラジオストクの西に位置するペレボズナヤ湾と発表されたが、同地が自然保護区内であるため、最近、ナホトカ港、ヴォストーチヌイ港に近いコズミノ湾に移転が決まったと情報があり、早速コズミノ湾を訪れた。



⑧8月3日(木) 10:00-11:00 スラビヤンカ港視察

日本からの中古自動車の輸入と日本と韓国向けの木材輸出、韓国向けの鉄くずの輸出が主な取扱品。年間の取扱能力は10万トン程度であり、非常に小規模な港湾である。極東船舶会社(FESCO)が運営している。



木材の年間取扱量は12万m³
65%が丸太で、35%が製材品



中古自動車は新潟、舞鶴、博多等から輸送される

⑨8月3日(木) 13:00-14:00 トロイツァ港(ザルビノ港)視察

ザルビノ港は 2004 年にモスクワの輸送会社トランスグループ AS に買収され、名称もトロイツァ港に変更された。昨年の取扱貨物量は 23 万トン。主な取扱品は、木材、鉄くず、綿、日本の中古自動車、韓国から重機、コンテナ、硫黄など。韓国からの旅客フェリーターミナルもある。

プーチン大統領の産業新興プログラムの一環として、今年 8 月 15 日にオーストラリアから 3500 頭の牛をトロイツァ港経由で輸入をして、ロシア国内に輸送することが予定されており、柵作りなどの準備が行われている。

また、今年 5 月 25 日にスラビャンカにて日中韓ロ4ヶ国会議が行われ、東春フェリーをザルビノ～新潟の間に定期航路を開設するために4ヶ国間で合弁会社をつくることが合意された。

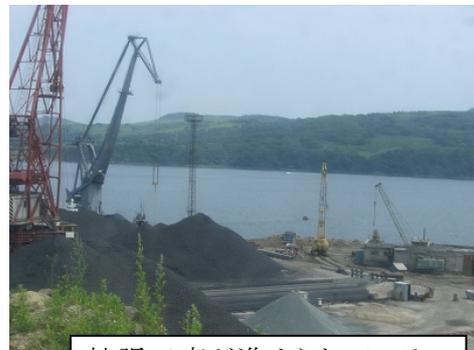


⑩8月3日(木) 15:00-16:00 ポシエト港視察

ポシエト港は、2004 年初まで金融産業グループ MDM(モスクワ実業界銀行)傘下の SUEK(シベリア石炭エネルギー会社)であったが、SUEK はワニノ港ムチカ湾の石炭ターミナルの開発に拠点を移し、ポシエト港を鉄鋼グループ・メチェルに売却した。メチェルは、南クズバスで石炭を生産しており、昨年、ポシエト港を通じて、80 万トンの石炭を輸出した。現在、2010 年完成予定で港を拡張しており、工事が完成すると取扱能力は年間 500 万トンになるとの説明があった。



南クズバスの石炭が輸出される



拡張工事が進められている

⑪8月4日(金) 16:00-17:00 ウラジオストク商業港視察

ウラジオストク商業港は、1993 年に民営化され、岸壁延長 4200m、17 バースを持ち、2005 年の取扱量は 645 万トンであった。主要取扱品は、金属(65%)、コンテナ(12%)、石油製品(5%)、鉄くず、紙・パルプとなっているが、昨年 21 万台の実績をあげた日本からの中古自動車が主要取扱品である。視察当日は、9 月から輸入規制が厳しくなる日本からの中古自動車の駆け込み輸入のため、敷地全体で通関待ちの中古自動車が所狭しと



日本からの中古自動車が所狭しと並ぶ

並べられていた。コンテナは従来はサハリンやカムチャツカ向けの国内貨物を中心としてきたが、国際コンテナの取り扱いを増やすべく取り組んでいる。

なお、ウラジオストク港の株主構成は、地元資本と大手鉄鋼グループのマグニトゴルスク冶金コンビナート(MMK)が半分ずつとなっている。



国内コンテナが中心だが、国際コンテナも増やしたい意向だ

4.まとめ

以上見てきたように、極東諸港は、次々とモスクワの大資本の傘下になっている。モスクワの資本に入ることにより、多少の設備投資が行われてはいるが、大規模とは言えない。

親会社の製品の貨物が安定的に取り扱えるというプラス面もあるが、取扱品目が親会社の製品に偏り、専用港化しているとも言える。

また、この数年でもモスクワ資本間での買収により、所有者が頻繁に変わっている。モスクワ資本の目的は、短期的な利益確保であり、長期的な戦略に立脚していないとの印象を受ける。そのため、今後も極東諸港の所有者がめまぐるしく変わる可能性が高い。

今回訪れた港湾の責任者が口を揃えていたことは、今年初めのロシア鉄道の料金値上げにより、貨物取扱量が激減していることへの不満である。ロシア鉄道の値上げの理由は、政策的に低く抑えられてきたトランジット料金と国内輸送の運賃の格差の是正であるが、いずれにしても大幅な値上げとなっており、そのために、韓国、日本からのコンテナ取扱量の激減、国内貨物の減少を招いており、影響が極めて大きい。

今年 9 月にロシア鉄道の副社長の来日が予定されているが、シベリアン・ランドブリッジの価格優位を保つためにも、運賃の再検討を促したい。